障害者の自立生活情報

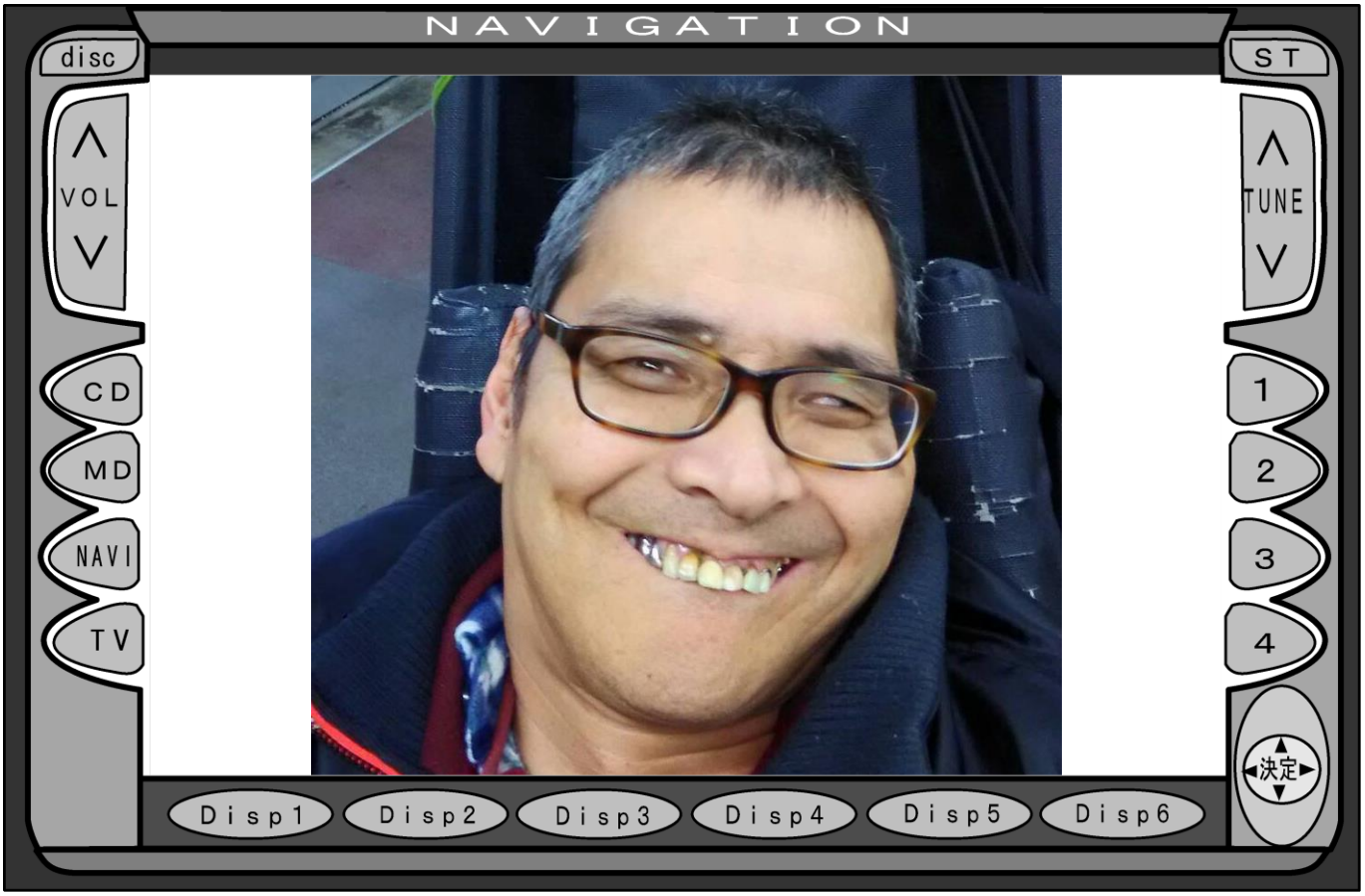
No.６２

（２０１９年７月号）

ナビゲーション

navigation

―――― 自立への道案内 ――――



今回の「わたし流障害受容」でインタビューをお願いしました田中　次郎さんです。

もくじ

●わたし流障害受容第9回（NPO法人アド企画　田中次郎さん）…… 2
●シリーズ　いろんなテーマの「なぜ」を解消！
～尾上浩二さんに聞く　インクルーシブ教育は、なぜ必要か～…… 8
●おすすめのお店紹介します！（飲食店編　ジョンウォル）…… 18
●新人スタッフ紹介（鶴羽　雄大）…… 19
●編集後記…… …… 20

わたし流障害受容

第9回

このコーナーでは毎回、重度の身体障害者にスポットを当てて、障害受容について考えてみようと思います。インタビューでは、自身の障害を受け入れ、自立するまでの過程において、どのような心の動きがあったのか、それは、何らかの影響によるものだったのかなど、自身の経験を自由に語っていただきます。その中から、みなさんそれぞれの障害受容のかたちを、探り出すことができればと考えています。

今回は、2019年3月号で取材にご協力いただいた、大阪市東成区にあるＮＰＯ法人自立生活センター・おおさかひがし（以下：おおさかひがし）の北岡賢治さんからＮＰＯ法人アド企画の田中次郎さんを紹介してもらいインタビューさせていただきました。

～プロフィール～

名　前：田中次郎
年　齢：58歳
障害名：脳性小児マヒ
所　属：ＮＰＯ法人アド企画（代表理事）
趣　味：魚釣り（南港によく行く）

ＮＰＯ法人アド企画の紹介

大阪市城東区で活動されており、就労継続支援Ｂ型事業所。広報誌やパンフレットなどの点字版を作成したり、リサイクルショップ「よってんか」があり、帽子や雑貨など激安価格で販売されています。

～いろんな家を転々と～

山下：今日はよろしくお願いいたします。今回は、アド企画の田中次郎さんに、障害受容についてお聞きしていきたいと思います。よろしくお願いします。

田中：お願いします。

山下：まずは、生い立ちをお伺いしたいと思います。田中さんの障害はなんですか？

田中：脳性小児マヒです。城東区の病院で産まれたんですけど、産まれた時に障害があると、すぐわかりました。母親のへその緒が首に巻きついた状態で産まれてきて、医者に１週間ぐらいしか生きられないと言われました。

山下：そう言われて、ご両親も不安だったでしょうねぇ。

田中：毎日泣いていたそうです。父親は公立高校、母親は公立小学校の、どちらも教師だったんです。今やったら考えてにくいことなんですけど、保育園に行くまでは、僕ひとりで寝かされたままの状態で家にいました。母親が勤めていた小学校が家の近くにあったんです。昼休みになったら、母が1回家

に帰ってきて、僕を着替えさせて、済んだら、とんぼ帰りで、学校に戻ってたという、その繰り返しが 2歳まで続いていたと聞いたことあります。

山下:寝かされたまま 1人で家に居てるってすごいですね！

田中:だいたいの 0歳児は、5ヶ月ぐらいから寝返りを打ち始めるんですけど、今、思えば、僕は、まだ 2歳でも寝返りを打てなかったから、それで安全だったのかなと思います。公団の 1階に住んでいたので、それもあったと思います。

山下：寝返りを打てたら色んな所に行ってしまうけど、打てなかったから逆に安全だったということですね。2階、3階だったら危ないですよね。2歳までは寝返りを打てなかったということですが、だんだん成長するにつれて動き回ることも増えてくると思うんですけど、ケガとか大丈夫でしたか？

田中：4、5歳になると寝返りも打てるようになったので、保育園のサークル内を転がっていました。トイレがしたいとようやく言えるようになったので、身体を後ろから支えてもらって、おまるでしていました。

山下:通っていた保育園は、他の子ども達と一緒に保育を受けてましたか？保育園の中では特別に介護してくれたことはありますか？

田中：その頃まだ、トイレがしたいと言えなくてオムツを付けていたので、それがだいたい 4、5歳までオムツを付けていました。

山下；田中さんの通っていた保育園には、他に障害児は通っていましたか？

田中:知的障害の子はおったけど、身体障害の子は僕しか、おらんかったんちゃうかなぁ。

それで、普通なら保育園を卒業したら、すぐに小学校に入学するんですけど、僕はそうではなかったんです。

山下：どういうことですか？

田中：6歳まで保育園に行って、その後は知り合いの家を転々と、月曜日から土曜日まで通っていました。

山下：みんな快く引き受けてくれましたか？

田中：本当に色々な方が関わってくれて、一般の近所のおばさんとか、キリスト教を信仰している人とか天理教を信仰している人とか、色々おられましたね。一番長く関わってもらったのが、天理教を信仰をしている人の家に 10何年か関わってもらってて、その間に養護学校に入学したりとかしてて、入学してからも下校の時に学校まで迎えに来てもらって家まで一緒に帰ったりしてました。

～10歳　小学校入学～

山下：色んな家を転々としてる間、学校はどうしてたんですか？

田中：学校は、10歳まで行くことができませんでしたが、学校の体制が整ったということで 10歳から光陽養護学校（現：光陽支援学校）に通うようになりました。その頃ってたぶん 1 クラスに担任の先生が 1人がいてて、子どもの数が多かったので、目配りが出来へんからとか、1人でなんでも出来へんから、体制が整わなくて、すぐに入学出来へんかったんかなぁ。1 クラスに担任の先生と生活の先生がいました。生活の先生がトイレや給食の食事介護をしてたように思います。

山下：その頃の養護学校は 1 クラス何人ぐらいいたんですか？

田中：1 クラス 10人～15人ぐらい居ました。1学年 2 クラスで、小学校から高等部まで合わせたら 300人ぐらい生徒がおったんちゃうかなぁ。

山下：先生はどれぐらい居たんですか？

田中：小学校から高等部合わせて 50人ぐらいかな。当時、養護教育の免許を持っている先生が少なくて、まだ、養護学校もそんなになくて、大阪では光陽養護学校と 堺 養護学校（現：堺 支援学校）の 2校ぐらいしかなかったので、先生の数も少なかったと思います。僕が勉強していた頃はプレハブ校舎でした。沼地を埋め立てて、建ててる校舎やから。けっこう、ボロい校舎でした。

山下：養護学校の頃は、どうやって学校の中を移動してたんですか？

田中：手動車いすが高等部になってからは、電動車いすの形の古い物に乗って移動してました。

山下：手動車いすの時は自分で動いてたんですか？

田中：そうですね。自分で動いてましたね。僕が高等部になった時に新しい校舎になったんです。だから新しい校舎は 2年ぐらいしかいませんでした。

山下：養護学校の時に障害者同士のいじめはなかったんですか？

田中：いじめはなかったです。ケンカしたことはありますけど。

山下：一緒に遊んだり勉強していく中で他の障害者を意識したことはありますか？

田中：意識してたというか、当時は、あんまり思わなかったんですけど、今から考えたら感心したことがありました。友達は、東大阪とか寝屋川とか遠い所から電車とバスを乗り継いで、頑張って来てて。それは感心してましたね。僕は、途中で旭区に引っ越ししたんですけども、朝は母親に車いすを押してもらって行ってたんです。母親が大変だったと思いますわ。

山下：確かにずっと押してたらしんどいですよね。

田中：電動車いすは高校になってから乗るようになりました。その頃はまだ校内だけで、移動していました。登校する時は手動車いすでした。道も舗装されてなかったし、歩道と車道の段差がまだまだ至る所に普通にありましたね。けっこう大変でした。

小学校高学年の時の田中さん

～僕の自慢～

山下：今までは、学生時代の頃をお伺いしてきましたが、大人になってからのことをお聞きしたいと思います。田中さんが障害者運動に関わり始めたのはいつ頃からですか？

田中：93年にアド企画に来たんですけど、そこから活動を始めて、エレベーター設置活動に参加していました。けっこう色んな所を回

りました。梅田とか京橋とか、阪和線とか。地元やったら京阪電車の千林駅やけども、まだ当時はエレベーターが付いてなかったので、毎日そこを使うことによって、京阪電車の大阪の小さい駅の中で一番早くエレベーターが付いた駅なんです。それが、僕の自慢です。

山下：エレベーターが付いてない駅を利用する時って駅員さんや他のお客さんに担いでもらってたんですか？

田中：そうですね。隣の駅から駅員さんに応援に来てもらって、時々、乗客の人にも手伝ってもらって、6人がかりで担いでもらっていました。

山下：駅員さんに手伝ってもらう時に嫌な事言われたことありますか？例えば「今、人が足りないから無理です。」とか。

田中：言われてたみたいなんですけど、内容は多少わかっていた部分もありましたけど、難聴だから聞こえていない時もありました。車いすから落とされかけたこともありました。千林駅に昇降機が導入されたんですけど、よく壊れてて結局、階段を担いで上げ下ろししてもらいました。

～親の反対を押し切って　一人暮らし！～

山下：一人暮らしは何年目ですか？

田中：93年に一人暮らしを始めたので26年ですね。

山下：一人暮らしするきっかけはなんですか？

田中：友達の男性ヘルパーさんに紹介してもらった女性の障害者の方に「自立生活は大変やけど、面白いで。」と勧められた感じです。何回か、その方の家にも行ったことがあります。

山下：一人暮らしをする時に親からの反対はありましたか？

田中：反対されましたよ。「障害が重度やのにどうやって生活していくんや。介護なんかしてくれる人おらへんで。」と、頭ごなしに言われて。自立する彼女が「介護者募集のビラを作って、それを配る努力をしたから、介護者が集まってきたんやで。」と、口が酸っぱくなるまで、言うてくれて。それでもまだなかなか許してくれなくて「1回彼女の所に連れていけ！」と言われて会ってもらったんやけど、彼女は言語障害が強い方やったから、話が全然かみ合わなくて「こんなんでお前自立できるか！」と言われました。親の立場からしたら、今まで、全然関わったことのない障害者が一人で暮らしてると言われても、お前がそんな事できる訳がない。と、散々言われたんです。

山下：それで、何か作戦を練ったんですか？

田中：このままやったら、前へ進まへんと思ったから、先にマンションを借りてちゃんと手続きを済まして「家を出るよ。」と話しました。家まで決めてきたから親もビックリして、仮契約までしてたから自立を承諾するしかなかったので、それで家を出ました。

山下：家借りてしまったら、親も反対しにくいですよね。準備している時に、親も気づいてなかったんですかね。それと、家を借りる時に保証人が必要だと思うんですが、保証人はどうしたんですか？

田中：引っ越しは、何人かいた友達に手伝ってもらいました。母は、「お前のこと、どこも相手にしてくれへんよ。」と、思ってたんとちがいますかね。保証人は、親父を無理矢理連れて行って保証人になってもらいました。

山下：そうなんですね。その頃の介護時間数は1ヶ

月何時間でしたか？

田中：その時、ちょうど大阪市が全身性障害者介護人派遣事業を始めた時で、1ヶ月153時間です。それで、ギリギリ生活をしていました。

山下：1ヶ月153時間で1日どれぐらいですか？

田中：その頃からアド企画に来ていたんで、朝と夜だけ介護者に来てもらっていました。それも、自分で介護者を見つけていました。時々、自分の用事で介護者の方がキャンセルされてしまうこともあり、それで食事も出来なかったこともあり、仕方ないので自分でおかずを買ってきたりしてました。

山下：先ほど、介護者を集めるビラを作ったと言っていましたが、どこでビラを配ってたんですか？

田中：自分で作ったビラを京阪電車の千林駅で1日1,000枚ぐらい配っていました。

山下：一緒に巻いてくれる仲間がいましたか？

田中：アド企画の中にも、こうやったほうがええでと言ってくれる仲間は2、3人いました。

山下：一人暮らしを26年続けてて最初の頃とか特に失敗とかすると思うんですけど。なにかありますか？

田中：やっぱり、トイレを失敗したりとか。翌日の介護を調整し忘れてて介護者が来なかったりとか。

山下：一人暮らしをしてて、良かったことはありますか？

田中：自分で時間を決めることが出来るし真夜中でも友達を呼べることが良かったことです。

鶴羽：ヘルパーさんを利用していて、ヘルパーさんとの関係で気をつけていることはありますか？

田中：僕はヘルパーさんは手足であるけども、一人一人、人格を持っていると思うので、礼儀を持って指示はしています。

鶴羽：もしヘルパーさんに頼みにくいことがあった時は、どうしていますか？

田中：僕の場合、割り切って頼んでいるので、例えば、肛門に薬を塗ってもらっているんやけど、若い男の子に頼んでるんですけども、最初に言うたもん勝ちで、そこは気にしないようにしている。

山下：そうですよね。確かに肛門に薬塗ってとは頼みにくいことやけど、ちゃんと説明したらヘルパーさんも分かってくれると思うし、頼まないと悪化してしまいますもんね。

自宅のベッドでリラックスタイム

～施設ではなく地域で生きたい～

山下：今日の話のテーマの障害受容って、何回か段階があると思うんです、田中さんが、1番最初に障害を受容したなとか、障害を意識した時期っていつごろですか？

田中：受容ってあんまりわかんないんですけど、障害者であるってことを受け入れざるを得なかったことがありました。

山下：どんなことですか？

田中：それは、乳母車で外に出て市民公園でちょ

っと一人でおった時に通りがかりの親子連れの女の子がお母さんに「どうしてこのお兄ちゃんは大きいのに乳母車に乗ってるの？」と聞いたんですね、その時、お母さんは、その子に分かるように説明するのかなって思ったんやけど、慌ててその女の子を連れて逃げるようにそこを離れて行ったんです。なんで説明せえへんのかなって、たぶん、そのお母さんも何を言うていいのかわからんかったんかなぁと。それと同時に僕の姿って言うのが、その親子にしたら見慣れない姿で乳母車でなくても普通の車いすでも説明出来へんかったやろなと思って、そこで自分は障害者やねんなと思った。

山下：何歳の頃ですか？その時の気持ちはどうでしたか？

田中：8歳か9歳の頃だったと思います。やっぱり悲しかったですね。

山下：親に「なんで車いすや乳母車に乗っているの？」と聞いたことありますか？

田中：あります。「なんで乳母車に乗っているの？」と聞いたら「自分では座られへんやろ。だから乳母車に乗ってるんやで。」と言われました。その時は、ショックはなかったんやけど、車いすに乗ってもずり落ちてたから仕方がないのかなと思っていました。

鶴羽：そういった経験もあり、何年か経って今、感じる田中さんにとっての障害受容とは、なんだと思いますか？

田中：これから僕らの障害って治ることがないじゃないですか。重くなっていく一方やから、重くなったら重くなったで、慣れていくしかないかなぁ。その中で、面白い生活が出来たらいいかなと思います。

山下：面白い生活って例えば？

田中：だいぶ昔より腰が弱くなっているんです。だからこの姿勢もちょっとしんどい時があるんですね。でも1日この車いすに座ってて家に帰って横になって背中を伸ばす瞬間、今日も生きたなって思う。それが、結構、自分の中で今日は何時間座ったから明日は、もっと座っておこうとか。ちょっと今日は痛かったから明日は1日寝てようとか、そういうことが、自分の中で楽しいかなと思いますね。

山下：ありがとうございます。最後に、これからの夢を教えてください。

田中：自立生活が20数年続いてるわけですけども、周りに迷惑がかかるかもしれへんねんけど、死ぬまで、この一人暮らしをやっていきたいなと思ってて、今その中で結婚出来たら一番ええねんけど、どこの施設に行くでもなく地域の中で生活できたらなって思います。今、父親が90歳なので、90歳まで僕も生きれたらいいなと思っています。それまで一人暮らしが出来たらええなと思っています。「障害者は、とにかく頑張らなアカンねんで。」と言う人がいてるけど「本当に何も出来なくても生きてたら、何かを見つけられる。」って伝えていけたらなと思います。それから、アド企画を退所したら、1回日本一周をしてみたい。実際に地図の通りに何日もかけてじゃなくて、何日かけてここまで行ったら次は、ここからがスタートで、あそこまで行こうとか。ロングランでやって行きたいなと思っています

山下：達成できる日を楽しみにしています。今日は長時間ありがとうございました。

田中：ありがとうございました。

シリーズ　いろんなテーマの「なぜ」を解消！

～尾上浩二さんに聞く

インクルーシブ教育は、なぜ必要か～

新コーナーを連載していきます！このコーナーでは教育、施設、交通など各分野に詳しい人にインタビューをしていき、当時の障害者や制度の状況、その制度はどう変わってきたのか？これからの課題はなにか。自身の生い立ちや体験などを基に語ってもらうというコーナーにしたいと思います。今年度のテーマは教育。今号では、ＮＰＯ法人ちゅうぶ代表理事の尾上浩二さんに教育についての尾上さん自身の学生時代のことを織り交ぜながら、国の制度のことや、インクルーシブ教育は、なぜ必要と思うのか。などお聞きしていきたいと思います。

尾上浩二さんプロフィール

1960年大阪に生まれる
障害は脳性マヒ
小学校を養護学校、施設で過ごした後、普通中学、高校へ進学
1978年大学に入学後、障害者問題のサークル活動をきっかけに、自立生活運動に取り組み始める
現在はＤＰＩ日本会議副議長　内閣府障害者施策アドバイザー　ＮＰＯ法人ちゅうぶ代表理事

～設備も何もない学校～

山下：今日は、よろしくお願いいたします。障害者の教育制度について尾上さんの生い立ちとともにお話をお伺いしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

尾上：よろしくお願いします。

山下：尾上さんのプロフィールを見たら 1960年生まれということで、1970年代は学生時代だと思うんですが、その頃の障害児の教育制度は、どんな感じでしたか？

尾上：僕が中学校に入る時には、障害のない子もある子も共に学ぶ教育が始まるか始まらないかという時期でした。その頃、進められていたのは、豊中市、高槻市、枚方市ぐらいやったかな。大阪市内では、まだそんなになかった。

山下：地域性で見ると豊中市、高槻市と北摂の方にかたよっているイメージがあるんです

けど、何か理由があるんですか？

尾上：いろいろと背景はあるんやけども、例えば豊中市も高槻市もどちらも人権教育っていうか、部落の子ども、在日韓国朝鮮の子ども、そういう多様な子どもを差別、排除しない、その人達の人権も守ろうということで熱心だったということ。新興住宅街だから、引っ越してきて団地に住んだりしてそういう人達が多かった。共に学ぶっていうのを受け入れやすかったんかなというのは、あるかな。

山下：尾上さんが通っていた学校には他に障害児はいましたか？

尾上：今でいう内部障害や難病の人はいたかもしれんけど、杖をついていたりして見た目でわかる障害の子は、僕以外はおらんかったかな。だから、修学旅行の時、2泊3日でみんな行ってたけど、僕だけ学校に残って自習させられた。学校側が障害のある子やと見てたのは僕だけやったな。

山下：教室移動も松葉杖でしてたんですか？

尾上：その頃は、エレベーターはもちろん、階段の手すりすらないから。手すりあったら何とかいけるけど、手すりが全然ないから身体を壁に擦り付ける感じで移動していて、特に音楽教室は 4階にあったから休憩時間の 10分での移動は無理やった。

山下：当時、学校からも排除されていた人は家でずっといてたんですか？

尾上：僕より年上の人はそうやったと思う。僕は、小学校は堺養護学校（現：堺支援学校）に通っていたんやけど、入学する時にテストがあった。テストに合格したら養護学校に入れるっていう感じ。養護学校ってその頃って親が付き添うのが前提やった。

山下：山下くんは一人で行ったん？

山下：僕は、高校は岸和田養護学校（現：岸和田支援学校）まで一人で通っていました。

尾上：そうなんやね。僕は、その頃、寺田町あたりに住んでいて、堺養護学校って阪和線の百舌鳥にあるねんな。それで、どうしたかというと、天王寺まで電車で行って、天王寺からスクールバスで通う。親が付き添うのが条件で、親は僕らが勉強している時は親同士の待機室っていうのがあって、集まってるねん。1日に 4時間も 5時間も一緒にいるから、親同士の繋がりも出来てくるわけ。親同士の自嘲的なネタなんやけど、堺養護学校は大阪にあるやん、一番古い養護学校は、光明養護学校（現：東京都立光明学園）というところで東京の世田谷にあるねんけど、「光明養護学校は障害者の東大、堺養護学校は障害者の阪大」と親同士で呼んでたという話もあって、でも、当時の親からしたら、地域の学校には行けないけれども、うちの子は堺養護学校に通わせてるんやと、複雑な感情が背景にあったんやろな。堺養護学校に行けるだけいいという感じやったんちゃうかな？

山下：尾上さんも、ずっと親御さんが付き添ったんですか？

尾上：僕の場合は、小学校2年まで付き添ってきた。母親も働いていたから、その後は付き添い無しで行くことが認められたんやけど、食事介護、トイレ介護、教室の移動が必要な子は親がずっと高校まで付き添う感じになるんちゃうかな。

山下：養護の先生がしたらいいのにと思うんですが。そういうことはしてくれないんですか。

尾上：そういう体制がいなくて、その頃は教科の先生と訓練の先生が居てるだけでした。地域の学校との違いは訓練の先生がいてるのと、1 クラスが小さかったことかな。僕らの時代って地域の学校は、1 クラス 45 人くらいやったんやけど、養護学校は 1 クラス 12人で1学年3 クラスで36人やから人数が少なかった。

～友達と遊ぶのは月1回～

山下：僕も養護学校には高等部から入ったんですが、人数は同じ感じでした。学校は、バリアフリーでしたか？

尾上：平屋やったから 2階とか上がることもなくて段差もなかったかな。でも車いすトイレとか、洋式トイレがなくて、日本で初めて洋式トイレが使われるようになったのは、1970年の万博の時ちゃうかな。だからトイレとかはバリアフリーではなかったな。さっきも言ったように、通学は電車とスクールバスを利用して行ってました。梅田から行くグループと天王寺から行くグループと住吉車庫から行くグループ、3つぐらいに分かれていました。その後、例えば、大阪府下で言うと、大阪市内で光陽養護学校（現：光陽支援学校）ができたりした。

鶴羽：僕は、高等部から光陽支援学校に行ってました。

尾上：そうなんやね。光陽養護学校が出来てから、大阪市内の北側の地域の子は光陽養護学校に行くように、南側の地域の子が堺養護学校に行くようになったんちゃうかな。僕の頃は、本当にあちこち来ていた。仲良かった子は高槻市から来ている子もおったな。地域の学校と養護学校の違いって、家帰った後の過ごし方が違うんやな。何かというと、地域の学校やったら家のすぐ近くに同じ学年の子おるやん。いったん、帰っても「お前の家に遊びに行くなぁ。」と言って、すぐ行けるやん。ところが高槻市の友達の所に行こうと思ったら、親と一緒に行かないといけなくて、親同士が予定合わせてくれへんかったら、友達同士で遊びに行かれへんかったんよ。だから、遊びに行けてもせいぜい、月1回ぐらいだったので、家帰ってもやることないなぁ。と思ってラジオ作るのが好きやって、ラジオ壊して組み立てて遊んでたね。

山下：壊して作り直せるもんなんですか？

尾上：ヒマやったからな。

山下：ヒマであってもそういう才能がなかったら、無理やと思うけど。今でも出来るんですか。

尾上：出来るよ。コンピューターを組み立てたりするのが得意なのにつながっているのやろうな。

～教育関係がきっかけで障害者運動と出会う～

山下：話は変わるんですが、養護学校義務化の動きが出てきたのは、いつごろですか？

尾上：養護学校義務化は、僕が大学に入ってから

やね。僕は、まず堺養護学校に行ったあと、小学校5、6年と大阪市内の施設に入院したんよ。

山下：僕も、その施設に入院したことがあります。

尾上：そうなんや。その施設は、1階がベッドでエレベーターで上がったら学校があるやん。30秒で登下校終わりって感じ。本当に外に出えへんかったやろ。

山下：そうですね。自由がないですよね。

尾上：施設の中に、出来るだけ地域に戻したいと思っている先生が関わってくれて、中学生になったら家の近くの学校に行った方がええよと言ってくれて、地域の学校に行くようになった。僕の通ってた中学校は、公立なのに「進学校」ということで有名で、そんなこともあって、そもそも障害のある子を積極的に受け入れなかったのではないかなと思う。だから、入学に当たって「階段の手すりとか設備は求めない、先生、生徒の手は借りない」といった念書を書かされたりもした。そんなあげくで入った状況でも、僕の中では中学校に入っていろんな友達が出来て、世界が広がったし。地域の中学校に行ったことは後悔してない。行ってなかったら、また別の人生が待っていたやろうなと。

山下：尾上さんが障害者運動と初めて関わるきっかけはなんですか？

尾上：大学で初めて障害者運動のことを知ったんです。その時、次の年に養護学校義務化が予定されていて、反対運動が盛り上がっていた時期。僕が大学へ入って関わったのが青い芝の会でした。障害者運動との出会いのテーマは教育ということになります。

山下：まわりが養護学校義務化のことで騒いでる時の尾上さんの気持ちはどうでしたか？

尾上：青い芝の会は養護学校義務化に反対してる団体で、なんでやろうと思って、養護学校義務化っていうのは「障害のある子を無理矢理、養護学校に行かせるようなもんだ。だから、障害のある者とない者を分けるから。無理矢理行かせるのはアカンな。」と思ってた。それが大学入りたての頃の話。でも、一方で、なんとか杖で歩けるくらいの障害の僕でも結構嫌な思いしたりとか、教室移動1つにとっても苦労したのに「重度の障害児みんなが地域の学校に行けるんかな」と最初は思った。

山下：1979年に養護学校義務化があって、1981年が国際障害者年で国際障害者年と聞くと障害者にとって良い事があるのかなと思うんですけど、その年に変わったことってありますか？

尾上：養護学校義務化の直後やったから、国際障害者年でノーマライゼーション、地域で共に生きる社会ということが言われたのは新鮮やった。やっぱり、国際的には共に学ぶ教育の方が大きな流れなんやという、そういう自分たちの自信にはなった。けれども、分けることを基本にした、日本の制度は変わってない。教育でいうと、養護学校義務制になっても、地域の学校に行きたいんやという子どもを応援しようということで奈良県や東京で運動して、地域の学校に入れたりしていたけど、養護学校義務化がデーンとあった。それで、国際障害者年で劇的に変わったという感じではなかった。

山下：教育以外のことに関してはどうですか？

尾上：国際障害者年をきっかけに制度とかに直接影響はなかったと思う。それをきっかけに障害者団体同士がネットワークを

作り始めた。大阪でいうと障大連（障害者の自立と完全参加を目指す大阪連絡会議）は昔は、国際障害者年を機に自立と完全参加を求める大阪連絡会（国障年大阪連絡会議　略：国障連）、と呼んでいたんやけども、国際障害者年をきっかけに国障年連絡会が出来た。国際的な面から見ると、ＤＰＩが出来たのも1981年で、世界中の障害者が自分たちの声を代表する国際的な組織を作ろうということで自分たちの組織を作ったんです。ネットワーク作りには国際障害者年はきっかけになったかな。

養護学校義務化阻止
全国総決起集会の様子

～地域に障害児がいない社会を作ってしまった！？～

山下：障害児が地域の学校に入れるようになったのは、いつごろからですか？

尾上：国の制度として認めたのは、実はつい最近やねん。2002年に認定就学制度というのが出来た。例えば、補装具使っても歩けない子どもは、特別支援学校ですよというのが国の基準で、歩けない子は地域の学校にはいないはず。でも、山下くんは地域の学校に通ってたやろ？

山下：家の近所の小学校は設備がなかったり、体制が取れないという理由で校区外の学校へタクシーで通っていました。体育と国語とかは養護学級で受けていました。

尾上：地域の学校に行って、僕の場合は普通学級だけやったから、もうその段階で教育行政上は障害児じゃないねん。例えば、それで今でいう特別支援学級だったり昔の障害児学級に籍があって、でも実際には普通学級にいてたりする場合は障害児だけども、基本、障害のある子、自分で歩けない子は地域の学校じゃないというのが文部省の基準。2002年になって、認定就学制度で、それでも、住んでいる地元の自治体が認めるやったら、特別に地域の学校に行ってもいいですよとなったのが、2002年の認定就学やから地域で学ぶ制度は何もなかった。

山下：僕が校区外に行ってたのは？

尾上：たぶん在籍は特別支援学級在籍やったんちゃうかな。そうでないと、校区外に行くって言う理由がない。普通学級やったら、わざわざ校区外に行く必要ないやん。だから、認定というよりは、家のすぐ近くには障害児学級がなくて、山下くんは障害児学級のある学校に通うことになったのではないかな。障害児学級は２つ３つ学校を合わせた障害児学級の場合があるねん。

山下：だから、僕は、校区外の学校に通ってたんですね。

尾上：2002年認定就学制度ができるまで、養護学校義務化で障害のある子は地域の学校ではなくて、養護学校か障害児学級に行ってるから障害のある子は普通学級にいない前提だった。だから、普通学級で学ぶための制度が作られるはずがない。さっきも言うたけど、地域の学校に行ってたら、それは、行政上は障害児じゃないねん。僕で言うと、「杖を使って歩いてる健常児」（笑）。

こういうとんでもない話につながるぐらい養護学校義務化は大きい問題でした。

山下：地域の学校に行ってたら障害児じゃないねん。ってなんか不思議な感じですね。

尾上：地域に障害のある子はいないという世界を作ってしまったんちゃうかな。日本は小学校、中学校は義務教育やん。高校からは選抜入試っていう仕組みやけども、実際には 97 % の子どもが高校に進学してるから、ほとんど義務化みたいなものなんやけど、それでも選抜試験に合格した人が入学するといった仕組みになってるでしょ。そのため入学拒否にあってたりする子がいてたり、そもそも山下君みたいに地域の高校に行けることすら教えられずに養護学校を勧められたりすることがあるからね。

山下：最近になって、障害児が高校や大学に行けてるなぁという感覚があるんですが。

尾上：身体障害の子は問題なく高校へ行けているというわけではないけど、やっぱり一番割を食うのは知的障害の子で、知的障害の子も高校へ行けるようにっていう仕組みが、大阪でいくつか出てきてるんだけども、地域の高校に行こうと思ったら、地域の小、中学校に行っていないと、高校へ行こうと思えないよね。全国的には、知的障害の子や重度の子が、地域の小、中学校に行っているという実態はまだまだ少ない。実は、小、中学校は障害者権利条約との関係もあって、親とか周りが頑張って主張したら地域の学校へ行けるように少しづつなってきたけど、やっぱり、高校に入ろうと思ったら壁はかなり高い。

山下：壁が高いというのは、例えばどんな壁があるんですか？

尾上：神戸で中学校まで地域の学校に行ってた子が高校受験しようとしたが落とされた。定員割れの学校っていうのは、学校長は定員を満たすように受け入れなあかんのに障害があるということで不合格にしたりとか。それで大きな問題になった。あちこちで、高校進学の壁が大きな問題になった。

～アメリカ等では障害あるなし関係なくともに学ぶ場がある～

山下：国ではどんな動きがありますか？

尾上：ＤＰＩも入っているＪＤＦ（日本障害フォーラム）で障害者権利条約のパラレルレポートづくりに、関わっています。障害者権利条約というのは、条約に入った国の政府は国連に報告せなアカンねん。でも、政府の報告って良い事しか言わないから、そんなことないやろと。政府はいいことばかり言うてるけど、実際こうやで、だからこう変えないとアカンという、障害者から見た報告を作っていて、今年6月に国連に出す予定です。

山下：日本もちゃんと障害児教育について考えていかないと他の国に「日本は何をしてるんねん！」と思われかねないですよね。他の国の教育制度はどういう風になっていますか？

尾上：パラレルレポートの作業に関わってて、改めて他の国の教育制度調べてみて、特に高校が義務化されていて、障害のある子が当たり前に行っているということをあらためて知りました。日本の教育制度は6・3・3制といって、小学校6年、中学校3年、高校3年になってるやん。それは戦後にＧＨＱが占領していた時期にアメリカから入ったからと習った。だから、アメリカも日本と同じようかなと思っていた。でも、アメリカは小学校

に入る1年前。要するに幼稚園の年長組から18歳まで13年間が義務教育になっている。それに加えて、障害のある子は、さらに 3年追加して学ぶ権利がある。落第という意味ではなくて、教育ってなんの為にあるかっていうことなんやけど、社会に出るために準備すると考えたら、障害のある子はプラス 3年延長して高校に通うことが出来ます。つまり21歳まで高校に居ることが出来る制度になっていた。

山下：どこの州でもあるんですか？

尾上：そうやね。国全体の法律で決まっていて、障害のある子が手厚く学べるようにする。障害があるから特別支援学校の高等部に行けではなくて、プラス3年かけて地域の学校で学ぼうという仕組み。日本も、障害のある子こそ高校で学ぶ権利が当たり前にあるという発想に変えないとダメかなと思う。

山下：教育で進んでいる国はどこですか？

尾上：障害のある子が障害のない子と一緒に学んだりとか、いろんな関係を伸ばしていくという意味で1つはアメリカで、北欧も同じように5歳から義務教育プラス高校まで義務化になっています。アメリカと北欧では福祉ではまったく違うイメージがあるねんけど、障害のある子の教育制度に関していうとアメリカも北欧も同じような仕組みに近くなっていて、北欧やったら成人学校があったりします。障害のある子だけではなくて、すべての健常者も含めて、日本だと 1回高校や大学を卒業して就職したら、あとは働くだけという感じやん。北欧はいったん社会に出てもう 1回学び直す為に大学に入ったり、その為に成人になってから学ぶ機会を作るっていうので、成人学校を作ってて、学校の中でも障害のある人も積極的に受け入れているエグモント・ホイスコーレという学校があったりします。

山下：そこでは、高校卒業して残りの 3年間はどんなことをするんですか？

尾上：障害のある子もない子も一緒に成人学校はキャンプをしたりとか、ＩＬＰ（自立生活プログラム）的な要素も含んだこともしたり、社会で生きて行くための力をつけるということもしているらしいよ。

～来年、再来年がチャンス！～

山下：今、日本の中で教育について議論されていることは？

尾上：権利条約批准するために、これまでの「障害のある子とない子を分ける」ことを続けている限りは国連に認められるはずがないということで、2013年に「本人、保護者が望むことを最大限に尊重して通う学校を決めなさいよ」という風に決まったんです。以前だと補装具を付けても歩けない子は、養護学校に行きなさい。ということだったけども。歩けなくても地域の学校に行けるようになってきて、実際にはそれぞれの教育委員会が決めることなんやけども、少しずつ変わってきた。最近は、文科省は医療的ケアの必要な子、医療的ケア児に対して力を入れ始めてきた。障害者権利条約は、インクルーシブ教育を権利として保障することを求めている。でも、日本はまだまだインクルーシブ教育が基本になってない状態。来年に国連で、日本政府が審査を受けるねんけど、特にここ 12年ぐらい特別支援学校に行っている子が多くなったり、支援学校も新しく設置されたりしている。「インクルーシブ教育を進めている」と日本政府は言

っているが、なんで特別支援学校に行く子が増えているのか、おかしいと国連からダメ出しがくる。インクルーシブ教育と言われているけども、こういう実態だ。実際は違うんだということを、障害者の立場から国連に伝える。それで、来年の夏に審査されて、「どんな子も地域で学べるようにしなさい」と日本政府に対する勧告が出ることを期待しています。それをきっかけにもっと地域で学べる制度にしていきたいなと思っています。国レベルでの議論というのは来年の秋以降かな。

山下：それまでに、なんとかしようとはならないんですか？

尾上：日本の場合は、教育が一番頑固っていうか分けるということでは一番頑固。たぶん、養護学校義務化からずっと、21世紀に入るまで国の制度では変わらなかったから。国に対する働きかけは何もしなかった訳ではないんだけども。

小坪：ちゅうぶとも関わりのある、大阪市内の小学校は、障害児が多いから、学力が下がると言われてきたけど、時間をかけて説明してきたんだという話があったんでそれは一緒なんだなと。

尾上：インクルーシブ教育をやってきた人って、むしろいろんな子どもが居てる方が、深い学びっていうのかな。たくさんのことを早く記憶してそれを正確に再現できる。それが学力と思ってるやん。でも、そうではなくて、考える力が大事やと思う。いろんなことをする時に、いろんな子どもがおった方が深く考えると思う。いろんな子がいてるから深い学びになってるんやと思う。

山下：教育に関して、大きな行動をしたことは？

尾上：国連での力、勧告をきっかけにしてマスコミとかの注目も集めて、大きな取り組みにしたいな思います。1979年から40年経ってるけど基本は地域の学校と支援学校と分けてることは変わってない。来年、再来年は絶対逃してはいけないチャンス。地域の学校に障害のある子が当たり前にくるようになったら、担任の先生も障害のある子を受け持たないということはないわけやから、すべての先生の養成課程の必修にインクルーシブ教育が入らないとあかんと思う。

いろんな子どもがいる方が良いと語る尾上さん

～すべての子どもにインクルーシブ教育を！～

山下：僕は、小、中学校と校区外の学校に通って、体育や国語、算数は養護学級で勉強して、家の近所に友達もいなくて、施設入所を経験して、勉強についていけず、高校は養護学校に進んだんですけど、でも学生時代の中で高校の時が一番楽しかったんです。それは、小学校、中学校の頃は介助員さんがいつも一緒に行動してたり、体育の授業はリハビリをしていたりとクラスの子とは別に活動していたから自由がありませんでした。でも養護学校に行くと介助員さんはいないし、体育も自分たちでどうしたらできるか考えてやったりして当時は、楽しかったんです。でも、今は、健常者と障害者と分けて教育を受けるのはよくないなと思っています。そこ

でお聞きしたいんですが、尾上さんは、なぜインクルーシブ教育が必要だと思いますか？

尾上：一人一人の体験は、決して無視したらいけないと思います。インクルーシブ教育とはなにか、きちんと整理することも大事。自分自身の経験からすると、地域の学校に行って自分の世界が広がったというのがあったんやけども、当時の実感としては、「地域の学校に行けたらその方がいいけども、でも一方ですべての障害児が地域の学校へというのは大変なこと。無茶じゃないかな」と、運動に関わった時の第一印象はそう思っていました。いろんな人の話や自分の体験、いろんな国のことを勉強して、それぞれ整理した。それで、インクルーシブが必要だと思いました。まず、なぜインクルーシブ教育かというと、障害のある子にとってのインクルーシブ教育ともう１つは障害のない子のインクルーシブ教育、両方で見ないダメだと思います。障害のある子にとって、地域の学校に関して、ともすればあまり良い思い出がない。僕の実体験でいうと、中学校、高校時代は、「学校は何もしてくれなかった」というのが実感です。でも友達が助けてくれたりしたという体験があった。もう一つ、インクルーシブ教育を考える時に、障害者だけが集められている社会があるということは、反対側に、健常者だけが集まっている社会があるというわけやね。障害者と接したことがない社会が作られるのは、とても怖いことだと僕は思ってます。インクルーシブ教育がなぜ必要かというと障害のある子が地域で生きていくために、その関係を作っていく。障害のある者ない者が一緒に学ぶという経験をするということが大事。地域でお互いが生きて行くために大事やと思います。単に地域でいてることでインクルーシブ教育っていうわけではないんですね。例えば、介助員を付けているのは、山下くんにとって良かれと思って付けているのかもしれないけども、他の子どもの「差し障り」にならないように付けてるとも言えるんよね。介助員が、障害のある子だけにずっと付いているのはインクルーシブじゃないと思う。

山下：現役の頃は、確かに介助員さんが見守ってくれて安心した部分もあったとは思いますが、それは、知らず知らずのうちに経験を奪われていたということなんですかね。

尾上：場所が地域の学校というだけだったと言うことにならないようにしないといけない。すべての子どもが生き辛さを抱えるような教育になってて、それを変えるために、障害のある子も含めたインクルーシブ教育をすることが、障害のある子だけではなくて、その事によって、周りの子どもも変わっていくということが大事なんじゃないかな。すべての子どもにとって教育を良いものにしていくインクルーシブ教育でないとダメだと思う。

小坪：僕自身、分けることの意味のなさ、正直関わったことが無いからイメージがない。それが差別につながるからインクルーシブ教育の方が良いなとは思うんですけど、今は大学まで行けるようになって、障害者がステップアップする為に働くとなって、でも働けない。自分の経験も含めてインクルーシブも大事やと思うんですけど、就職っていうのをどう捉えてい

くのかが大事なんじゃないかと思った時に、まだまだ本当の意味でのインクルーシブじゃないんだと。今日は教育というテーマに話を聞いてきましたが、働くということを変えていくタイミングとか目途とかあるのか、お聞きしたいです。

尾上：小坪くんの問題意識はすごく大事で、それは障害がある子だったら特別支援学校に行ったから、働くということにつながりやすいという話はおかしいわけよ。地域の学校で、延長して、社会に出るための学ぶ機会を得ることも含めて可能と言うふうに出来るかどうか、さっき話した成人学校的なものまで視野に入れられるかとか。今の日本の現状を考えたら夢みたいなことを話してると思われるかもしれないけど、そういう風なことをイメージしないと。今の日本教育制度の現状にポンと乗せてインクルーシブ教育って考えると、あんまり先が見えない。それと、学校教育法という法律では「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けること」が特別支援教育の目的とされています。「障害による学習上又は生活上の困難の克服」と、未だにバリバリの医学モデルです。そのため、子どもたちは学校では社会モデルを習うことはなく、障害者運動と出会って初めて社会モデルを知ることになる。もっと言えば、障害者運動と出会わないと社会モデルを知ることもなかなかできない。ぜひとも障害者権利条約が言う社会モデルに変えないといけない。大きな展望を掲げることが大事な時期かなと思う。

山下：今日は、教育に関して、たくさんお話を伺うことができました。長時間ありがとうございました。

尾上：ありがとうございました。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ちゅうぶでは、2018年3月に一木玲子さん（写真：右　大阪経済法科大学）にインクルーシブ教育について講演をしていただき、尾上さんや、たくさんの方が参加してくださいました。

これからも、いろいろなことに取り組んでいきたいと思います。

おすすめのお店紹介します

飲食店編

調査者：手動車いすユーザー1名　電動車いすユーザー1名
調査場所：韓国料理　ジョンウォル
住所：大阪府大阪市東住吉区駒川4-5-9
電話番号：06-6691-5155
営業時間：午前11時～午後10時30分（ラストオーダー　午後10時）
定休日：無休
座席：25席
アクセス：大阪メトロ谷町線駒川中野駅から徒歩3分　近鉄南大阪線針中野駅から徒歩4分

お店は、駒川商店街の中にあり、店内入り口は手動扉でした。調査へ行った時は、たまたま、店員さんが、気付いてくれてドアを開けてくれました。店内は広く、椅子も移動できるので、車いすが入りやすかったです。車いす数台で食べに行っても充分入れると思います。料理は、チヂミや焼豚、冷麺などをお腹いっぱい食べました。おいしかったです。
みなさんも、ぜひ、行ってみてください！

新人スタッフ自己紹介

名　　前：鶴羽　雄大
年　　齢：1996年（平成8年）12月25日生まれ(22歳)
障 害 名：筋ジストロフィー(デュシェンヌ型)
所属部署：自立生活センター・ナビ
趣　　味：カラオケ、野球観戦（阪神ファン）

はじめまして！こんにちは。鶴羽雄大です。2018年7月の 就職 総合フェア 2018 でＮＰＯ法人ちゅうぶのことを知り、同年10月に 2週 間程 研修 をさせてもらい、経験を積ませてもらいました。

そして 2019年4月から自立生活センター・ナビでパートとして、 週 3日勤務することになりました。

私 は大阪市 中央 区生まれです。 小学校、中 学 校は地元の普通学校で高校からは大阪市 旭 区にある光陽特別支援学校（現：光陽支援学校）に、大学は大阪府和泉市にある桃山学院大学に通っていました。学生時代には、先生や 教授 の方々など色んな人の支援や支えによって 私 の学生生活での友達関係や学べる 環境 などが 充実 していたので、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。大学に通ってみようと思ったきっかけは、小学校 の頃から 障 がい児福祉手当や地下鉄やバスの無料 乗車証 などの障 害福祉サービスに支えられてきたので、今度は 私 が福祉を専門的に学んで、社会に貢献したいと思い進みました。

高校2年生の時、先生に「あなたの障 害はなんですか？」と聞かれましたが、その時は、自分の障 害について何も知らなかったので、その後、パソコンで調べた時に筋ジストロフィーという障 害だと知りました。しかし、 私 の障 害について関心がなかったので 衝撃 を受けずに自分の障 害を受け入れていました。ナビに入って 4 か月経ちました。仕事内容は主に機関誌ナビゲーションやちゅうぶ通信の原稿作成で、電車、バスのアクセス・バリアフリー調査や障 害当事者の方に取材してきました。今まで、私は障 害当事者に取材したことがなく、不安でした。例えば、言語障 害の強い方は言葉が聞き取りにくく、こちらから聞き返すのは失礼になるのではと思っていました。しかし、聞き返さないで、わかったふりをする方が、よくないということを知りました。

これからの 目標 は、たくさんの自立生活センターの方々と 交流 をしながら障害者運動に関わる方にお 話 を 伺 って学びながら、経験を積んでいきたいと思います。将 来は一人暮らしをして、今まで経験出来なかったカラオケのオールや自分の好きな物を買いに行くなど、自己選択、自己決定できる生活を目指したいと思います。そして、自分が自立生活することで他の障害者のロールモデルになりたいです。

編集後記

みなさん、こんにちは。今年も暑い夏がやってきそうですね。「あつい」と言えば、毎年、大阪府交渉が熱く行なわれます。今年は7月中旬でした。介護の問題や施設からの地域移行、日中活動、交通関係等、障害者の自立生活に直結する様々な問題に対して交渉してきました。今月号のナビゲーションで取り上げた教育についても同様です。インクルーシブ教育が言われている中『支援学校へのニーズがある』等の理由で、この間、支援学校が増えてきています。教育で分けられることで、障害者は生き辛さを感じていたり、いろんな経験が奪われてきています。そんなことが、これ以上起きないよう、これからも粘り強く交渉を続けていきたいと思います。

●<u>各団体で企画しているものがあれば、当センターが発行している機関誌ナビゲーションに掲載してみませんか？</u>ナビゲーションは 3月、7月、11月に発行しています。掲載する際、各企画のお問い合わせは当センターではなく、直接、各団体にお願いいたします。当センターにお問い合わせいただきましても、お答えいたしかねますので、ご了承ください。

●みなさんからのご意見、ご感想をお待ちしております。記事に対するご感想、日ごろ感じておられる疑問、こんな情報を知ってるよなど、なんでも結構ですので下記の連絡先までお寄せいただければ幸いです。また、突然、取材にお伺いさせていただき、ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、その際には、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-▽-▽

自立生活センター・ナビとは…

☆私たちの考える「自立」は…

働いてお金を稼ぐ事や身の回りのことを全部自分で出来るようになる事、それだけが「自立」でしょうか？もちろんそれも大切なことですが、できない事は人の手を借りたり、気持ちを上手く伝えられないときには仲間にサポートしてもらったりしながら、一人一人の生活を創っていくことも「自立」であり、色々な方法でお手伝いしていきたいと考えています。

☆地域で障害者の自立を実現していくための「道案内（ナビゲーター）」として、例えば「介護してくれる人を探しているんだけど？」「家の中をもっと使いやすくしたいけどどうすればいいの？」そして「自立したいけど自分には無理かな？」自立生活センター・ナビでは、こうした障害者や家族の悩みや相談について、障害を持つピアカウンセラーが同じ障害者の立場でお話を伺い、制度の説明や申請のお手伝い、住宅改造などのアドバイスをさせていただきます。その他、電動車いすで街へ出かけたり仲間と一緒に料理を作ったり地域で生活していく上で必要なことを、楽しみながら経験できる「自立生活プログラム」や、自立生活に関わる各分野の方々をお招きしてお話を伺う「自立生活セミナー」の開催、情報誌「ナビゲーション」の発行も行っています。

△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△-▽-△

発行　自立生活センター・ナビ　　でんわ　06（6760）2671

住所　〒546-0042 大阪市東住吉区西今川2-3-8　　ファックス 06（6760）2672